

説教 『聖霊の言葉は、深く、広く』 山本 護牧師  
聖書 ヨエル書 3:1~2/使徒言行録 2:1~13

過越祭から50日後の五旬祭。イエスの昇天(使徒 1:9)で中心を失った弟子たちは、この伝統的な祭りのために集まっていた(2:1)。そこに、嵐のような響きと共に聖霊が降臨し、弟子の一人ひとりととどまった(2:2~3)。近所の人々が何事かと出て来るほどだから、奇妙な轟音だったのだろう(2:6)。

炎のような舌が各々の弟子にとどまると(2:3)、「一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した(2:4)」。それを聞いた諸国のユダヤ人は、「だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されるのを聞いて、あっけにとられてしまった(2:6)」。状況を読み解けば、無学なガリラヤの漁民たち(2:7)が数多の外国語で語ったわけではない。判別できない聖霊の言葉を、諸国のユダヤ人が母語で聞き取った、と言えよう。傍の者にすれば、弟子たちの姿は「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ(2:13)」と酩酊状態に見えた。だが聖霊は、一部の弟子に限らず、全世界(2:9~11)に降ることになる。しかしこれを「聞こうとしない」者には嘲りの対象だった(2:13)。

聖霊の言葉の意味は、無縁な者には分からないが、これを聞く者には母語として深く浸透する(2:8)。学習ではない、心に根をおろし、身体を揺さぶる母語。聖書原典でさえ案内言語に過ぎない。重要なのは聖霊の言葉それ自体、すなわち私たちの母語だ。私たちにとって聖霊の言葉とは近代の日本語。たとえばイスラーム教ではアラビア語のみが聖典であり、日本仏教では漢訳経典を母語に訳さない。意味よりも呪文のように唱える「音」を選んだがゆえに。プロテスタント教会は、万人祭司という立場から聖書を母語で「自ら読む」ことを重視するが、それは教会の最源流、聖霊降臨に由来している。

本質的にキリスト教には、本山や聖なる中心のようなものはない。なぜならば、神の右に座し給うキリストが中心で(マルコ 16:19)、世における中心はそれぞれのローカルな場だから(16:20)。「炎のような舌が分かれば分かれに現れ、一人一人の上にとどまった(使徒 2:3)」。聖霊は私たち一人ひとりに宿る。そして私たちは、深く浸透する母語で聖霊の言葉を聞き、自分の言葉でそれを語り継ぐ一人となる。

諸国のユダヤ人はあっけにとられ(2:6)、驚き怪しみ(2:7)、とまどった(2:12)。ここは弟子になるか否かの分岐点かもしれない。教会生活もまた、日々聖霊の息吹を得て、あっけにとられ、とまどい続ける。これが創造の業の現実ではないか。御言葉は螺旋を描き、母語として私たちの深みに下降する。そして希望の御言葉は私たちの言葉となり、このローカルな場から(2:7~8)世の隅々へ伝えられていく。私たちの伝道は、御言葉を伝えるというより、自ずと伝わる御言葉を手渡していくイメージである。

「わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。あなたたちの息子や娘は預言し、老人は夢を見、若者は幻を見る(ヨエル 3:1)」。霊が注がれ、私たちは夢を見、幻を見ている。聖霊降臨とは、劇的な出来事もあるが、淡々と見る幻が多いように思う。「奴隷となっている男女にもわが霊を注ぐ(3:2)」。霊が注がれる条件は、ない。そしてキリストの聖霊は、いかなる状況からも、死の拘束からも私たちに解き放つ。



【おまけのひとこと】

嵐の日があり 穏やかに晴れる日がある ただ同じところでくり返されているのではない 螺旋は私の存在深くへ 円環を描きながら下降し続けている いや少しずつ上昇している と言うべきか